

アオリイカの短期養殖について



水試の生簀で養殖試験中のアオリイカ

平成23年8月

福井県水産試験場

1. はじめに

アオリイカは、福井県沿岸域の定置網や釣り漁業で漁獲され、沿岸漁業の重要な資源の一つになっています。アオリイカは暖海域に生息するイカで、福井県では、おおむね5月～12月頃まで漁獲されます。

水産試験場では、当年生まれの、天然の小型アオリイカを用いた養殖試験を行い、その結果、魚類にはみられない早い成長を示し、ごく短期間で商品化できることを明らかにしました。

この手引では、水産試験場で行った海面網生簀での養殖試験の結果をもとに、養殖する上でのポイントをまとめましたので、参考にしてください。

2. 種苗の入手と輸送

福井県では、初夏に生まれた小型のアオリイカが、8月中旬過ぎから沿岸の小型定置網にまとまって漁獲されることから、このイカを利用して養殖します。イカの入手法は、釣り（エギング）でも可能ですが、この場合は、一度に大量に確保できないことや、傷が付きやすいこと等で問題があります。手に入るイカのサイズは、8月では30～70gが主体ですが、漁期が遅くなると徐々に大型化し、9月中旬以降になると100gを超えるものもみられます。

種苗の確保には、漁獲物を丁寧に扱ってくれる漁業者の協力が不可欠です。このため、水産試験場では、若狭町や敦賀市の小型定置網の漁業者に依頼して、漁獲時にアオリイカだけを選別し、円筒型のビクに活かしてもらい、水産試験場まで活魚輸送しました。

アオリイカはスレに弱いため、水ダモという、底がキャンバス地のタモ網ですくい、輸送用の容器に海水とともに收容し、エアレーションまたは酸素を詰めて運搬します。70gまでのイカなら、ビニール製の容器1袋あたり10尾程度は收容可能です。

輸送中にアオリイカが墨を吐いて衰弱または死亡することがあります



が、これは水温の違いが刺激となって墨を吐く場合が多いので、なるべく水温を一定に保ってイカに刺激を与えないことが重要です。

3. 養殖方法とポイント

アオリイカは、魚類と同様、海面生簀で養殖を行うことができます。アオリイカは高水温ほど摂餌が活発になるので、普段は網底を浅くした方が、表層の高水温帯での成長が期待できます。ちなみに、水産試験場では5m×5m×深3mの生簀を用いました。しかし、大雨等で表層に淡水が流入するとイカの活性が低下しますので、このような場合は網底を5m以上の深い生簀に交換する等の注意が必要です。

アオリイカは何かのはずみで水面をジャンプすることがあり、勢い余って天井網に突き刺さって死亡する例が何度かみられました。このため、天井網より遮光シートで生簀を覆う方が、より安全と思われれます。

POINT

- ・ 生簀の網底は浅い方が良い。ただし、大雨等の恐れがある場合は網底を深くする。
- ・ 生簀網は遮光シートで覆う。

アオリイカ養殖では、餌の与え方にコツがあり、これがうまくいくと比較的容易に飼育できることが明らかになりました。

餌はアジ類（鮮魚、冷凍魚）を飽食量与えました。イワシ類（カタクチイワシ、マイワシ）、イカナゴ、アジ類（アオアジ、マアジ、ムロアジ）の3種類の餌料別成長比較では、アジ類区が最も成長、生残が優れていたことから、安価で入手が容易なアジ類が最も適しています。

なお、活餌を最初に与えてしまうと、その後、死餌を与えてもなかなか食べず、餌付けに苦労します。死餌を与える時は、しばらく餌を与えず空腹状態にしておくと、1尾のイカが我慢できずに死餌を抱きつき、他のイカも先を争うようにして抱きつくのが観察されます。

アオリイカは餌を腕の中に抱きかかえ、覆い隠すようにして食べるため、餌の一部が腕からはみ出ると、他のイカから横取りされたり、攻撃されて共食いの原因にもなりますので、イカの腕からはみ出すような大きな餌は与えないことが重要です。

また、イカは多くの場合、頭部を切り落として胴体部のみを食べるので、食べ残す頭部や尾部は、あらかじめ切断してから与えた方が効率的です。

POINT

- ・ 餌はアジ類（アオアジ、ムロアジ、マアジ）の鮮魚または冷凍魚を使う。
- ・ 餌を与える前にイカを空腹にさせておくこと。
- ・ 餌はイカの腕長よりも小さなサイズを与えること。
- ・ 餌は頭部や尾部を切り取って与えること。

4. 成長と生残

アオリイカは小型のうち、外見で雌雄の区別が難しいですが、おおよそ 200g を超えると容易に雄雌の区別ができるようになります。すなわち、雄は背中の白い模様が細長い紐状なのに対し、雌では楕円形になります。成長は雌雄によって差があり、雄の方が雌よりも大型になります。水産試験場で行った、9月15日から12月20日までの97日間の養殖試験では、雄と雌の平均体重はそれぞれ1,166gと800gになりました。12月中旬以降になると水温が20℃を下回り、イカの成長も期待できなくなることから、養殖を切り上げて出荷した方がいいでしょう。このように、アオリイカは雌雄で成長差がみられるものの、極めて短期間で出荷サイズに育てることが可能です。

生残率は80%以上ありますが、スレに非常に弱いので網換えは極力控えることや、活イカとして出荷する場合は水ダモで丁寧に扱うなど注意が必要です。

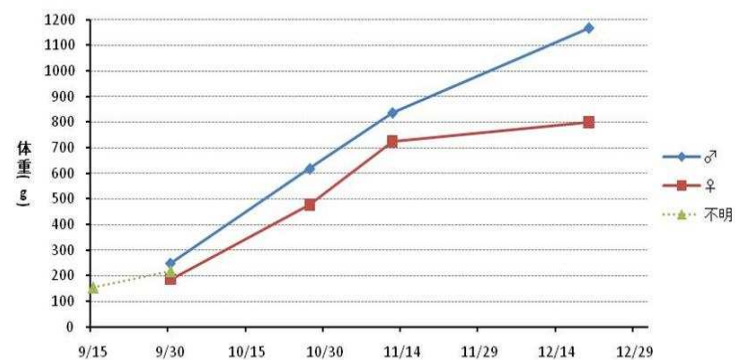
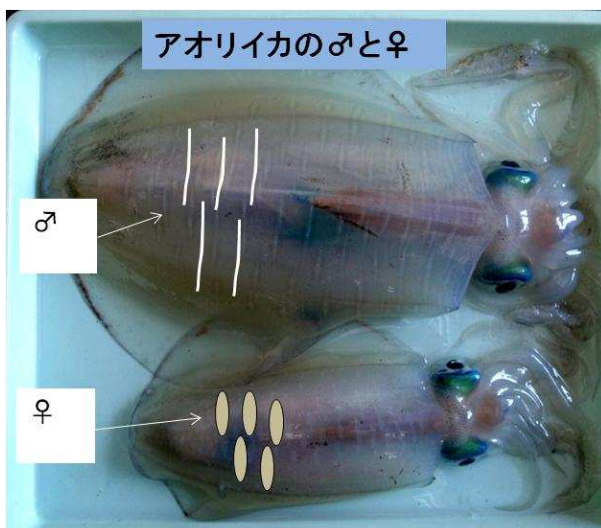


図 海面生簀でのアオリイカの成長

5. 養殖イカの活用

このように、天然の小型アオリイカを使った養殖は、安価なアジ類を餌に、約3ヶ月間という短期間で1kgサイズに育てることが可能です。年末にかけて、しけ等で水揚げの少ない時期を狙った出荷や、活イカによる出荷など売り方に工夫すれば、魅力的な新魚種といえるのではないのでしょうか。

発行：福井県水産試験場

電話：0770(26)1331

FAX：0770(26)1379

E-mail：suishi@pref.lg.jp

ホームページ：www.fklab.fukui.fukui.jp/ss/